

おたすけ活動報告書

2016年度 金村麗華 東面安沙子 伊藤有梨花

【活動目的】

近年高齢社会を迎えた日本では、バリアフリー・ユニバーサルデザインという言葉聞く機会が多くなりました。公共施設にEV(エレベーター)がついたり、階段に手すりがついたり…まちを見渡すと沢山の整備があります。しかしながら、観光に訪れ、楽しむことができるユニバーサルデザイン化はされているでしょうか？これから2020年東京オリンピック・パラリンピックを控えている日本では「観光」が重要なキーワードとなるはず！障がい者の方や高齢者の方が訪れやすい観光地になることで、更なる観光活性化も期待できると考えられます。また奈良県は日本有数の観光名所地であり、今後も多くの国籍障がいの有無問わず方が来訪することが予想されています。そこで、私たちグループはこれから奈良が今より、多くの方が訪れやすく、楽しむことができる観光ユニバーサルデザイン整備ができることを目指して、日本各地で徐々に進みつつある先進事例を調査しました。

【活動対象地】



①東京

選定理由：日本の首都であり、技術やデザインの最先端が集約されている。まちのなかにも様々な整備がみられると考えた。

また、視覚以外の感覚を用いたアート(デザインプロジェクト)を体験し感性を磨き次に生かす。

②金沢

選定理由：NPOが中心となり、まちぐるみでバリアフリー(ユニバーサルデザイン)を契機にまちおこしをしている。団体の方にお話を聞かせて頂いた。

また、まちは奈良市内とよく似ており歴史的価値が高く、奈良での汎用性があると考えた。

③伊勢・鳥羽

選定理由：NPOが活発にバリアフリー活動を行っており、日本最先端である。

また、伊勢神宮など神社でも取り組みがされており、奈良の参考事例になると考えた。

【活動報告①日本首都東京で見られるバリアフリーユニバーサルデザインを超えた先進的事例】

—首都東京—多くの人が行きかう東京は最先端の技術を用いた試みが沢山ありました。

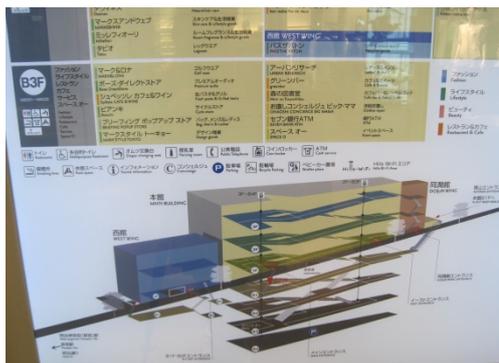
従来のバリアフリー整備というと、障がいを持つ人はスロープ、健康な人は階段や、車いす利用者の人はこちらなどといった「特別」な整備が多いような気がします。しかし、私たちグループは、このように区別をしてしまう整備は、よくないのではないかと感じていました。誰か特定の目的の人に対しての整備は、対象者以外を排他的に考えてしまう可能性があると感じていました。

今回初めに訪れた東京では、みんなが使用しやすいようなデザインがあちこちにありました。以下写真とともに報告をします。



①建築デザインから考える—スロープ型商業施設

例えば車いす利用者の祖母と買い物に行くことになった場合、従来のフロアごとになっている建物であれば、EVがなければ自由に移動できません。しかし、この施設は、すべての階層を緩やかなスロープで結ぶことにより、どの階にもスムーズに一筆動線で移動することが可能となっています。一見すると歩く距離が増えるのでは？と思われがちですが、ゆっくり買い物を行うことが目的である商業施設においてはあまり気になりません。ベビーカーや車いす利用者の方が多くみられました。



(写真：上から①施設スロープの様子、②案内図、③利用の様子と休憩スペース)

②憩いの美術館～観賞だけにとどまらないマルチな空間



博物館や美術館というと、絵画をみるや作品を見るといった特定の目的をもって来館することが一般的ですが、この美術館は展示スペース以外の空間を市民に開放し、お茶を飲みに来たり、読書をしたりなど各々が自由に過ごしていました。バリアフリー整備は最低限のことは勿論、職員の教育が行き届いていることで、快適に障がい者や高齢者の方も来館されていました。



(写真：左上から①新国立美術館、②案内図（触地図）、③案内インターフォン ④様子と休憩スペース)

③ダイアログインザダーク外苑前～感覚を用いた新たな視点



東京視察のメインはこの企画に参加することでした。

まっくらやみのエンターテイメント、ダイアログ・イン・ザ・ダーク。五感の喜びと、コミュニケーションを。というコンセプトで開催されているこの企画は、我々が、生活で最も使用する視覚を用いずに「日常」空間を体験するというものでした。真っ暗で

何も見えないのにどうやって情報を得るのかというと、例えば聴覚であったり触覚、そしてグループで行動をするので、周りの人とのコミュニケーションから得ます。体験を通じ、最初は真っ暗な暗闇の中で、右も左もわからずとても不安だったのですが、人の声、音、床の触感などだんだん今までの生活で重要視しなかった感覚が有効な情報源として使用できるようになり、暗闇体験も楽しくなりました。また、こんなに人と密にコミュニケーションをとったことが今まであったのかという程、初対面の人と協力し、参加することができました。そして最終的には人の声の反響でどこに誰がいるかわかるようになるほど、私たちは適応能力があり、今まで使用していない潜在的な日常生活の別の見方を体験できました。普段過ごしている日常や生活というものがいかに視覚に頼り、物事の側面しか見れていなかったんだな。と考えさせられるとても素晴らしい体験でした。

【活動報告②ユニバーサルなまちづくり・観光を学ぶ金沢】

—金沢—文化の発信に力を入れ、ユニバーサルなまちづくりを実践するまち

次に訪れたのは金沢です。歴史的な街並み、文化財が残る金沢は、奈良とどこか似た雰囲気を持ち合わせています。また、金沢は新幹線開通を契機に様々な年代へ観光促進を行っています。

今回は、そんな金沢で見られたユニバーサルな空間と、ユニバーサルなまちづくりを率先して行っている NPO 法人にお話を聞きに行ったことについて写真とともに報告します。

①石川バリアフリースターセンター



ツアーセンターでは、代表者の方に(1)現在の取り組み(2)バリアフリーの考え方(3)これからの方向性などについてお話を頂きました。

(1)取り組みについて

まず、バリアフリー観光＝地域密着型の地域おこしであることを学びました。まちにある魅力を知り、問題を抽出し、改善を施す。ここにターゲットとして高齢者の方や障がい者の方に特にフォーカスを当てたものの1つがバリアフリー観光に結果的につながるというお話をしてくださりました。

(2)バリアフリーの考え方

(1)と同様にこの地域では地域活性化の一つのきっかけがバリアフリーでした。話を聞いていると、バリアフリーという意識を地域が共通で「意識」することによって人々の距離が縮まり、まちの中の細かな問題に気付くようになったそうです。そして、地域内での啓発化が広がり、活動は更に広がっていくそうです。ある村では、地域おこしの一環でバリアフリー活動を NPO が最初は介入して始めたそうですが、結果的に地域に考えが残り、継続的に自発的活動が起こるほど促すことができたとおっしゃっていました。

③これからの方向やアドバイス

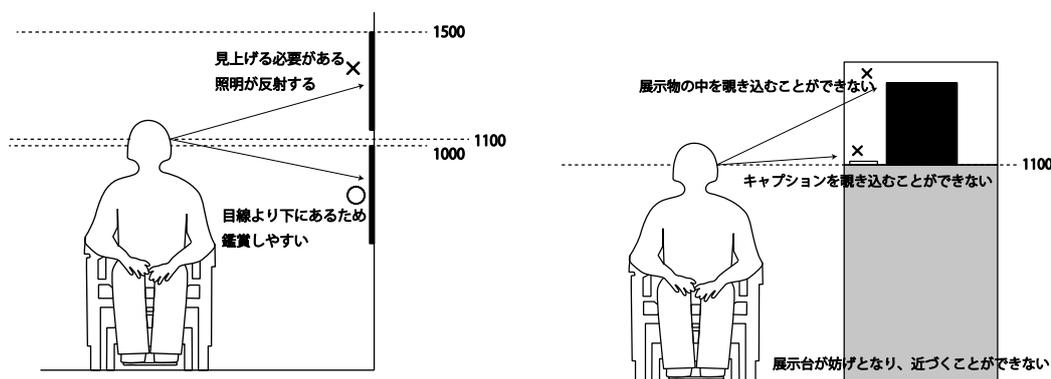
みんなが知らないものこそ観光の新たな楽しみがあるという事、歴史が残っておりあまり知られていない情報は有効な観光の要素であるという事を学びました。またバリアフリーや観光は、まちおこしや地域とのつながりを強固にさせてくれる一つのきっかけになりえること。時間がかかるが、これからの社会にはとても必要であることを学びました。

②美術館での発見-ユニバーサルな展示空間とは？-

次に、金沢中心部には、数多くの美術館があります。今回私たちは実際に車いすに乗り、各施設の取り組みについて検証を行ってみました。すると、意外なところに問題点を発見しました。

私たちは、バリアフリーというと段差や移動などといったその場所に行くまでの移動や過程の問題について着目しがちです。しかし、観光を楽しむことは、移動ができるだけでは成立しません。その施設や体験を私たちと同じように「楽しむ」ことができるかが重要となるはずだという事に気づきました。そこで今回、特に展示空間における鑑賞のバリアとどのように考えればより多くの人を楽しめる空間になるのかを検討しました。

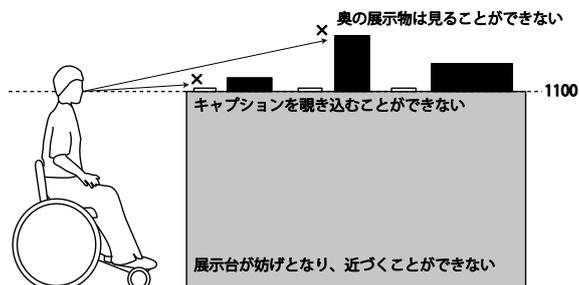
①石川県立美術館にての気づき



壁面展示の空間でいちばん鑑賞の妨げとなったのは照明の反射だと感じました。天井に蛍光灯が連なっており、照明の光自体が強い展示物への距離等の制約はありませんでしたが、展示物ごとに照明が気にならない位置が異なるため時間と労力が必要となりました。展示ケースはほとんどが目線の高さになっており、そのため、展示物の横の部分のみしか見えないことがほとんどでした。展示台の下にスペースがなく、車椅子のフットサポートから座面までの高さがプラスされるため、展示物に近づくことはできません。展示物によって鑑賞のしやすさが左右される場合も多く、絵画や掛け軸などを見る場合より

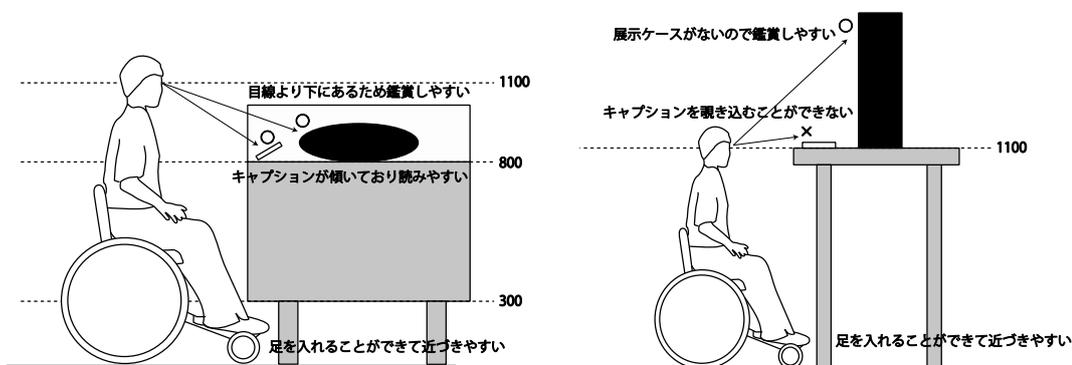
も、器の中を見ることの方が困難であり、ほとんど見ることでできない状況でした。

②金沢 21 世紀美術館での気づき



金沢 21 世紀美術館では、施設内の整備に車椅子利用者向けの工夫がされている箇所がされていました。多目的トイレやエレベーターだけでなく、展示施設の案内板や設備の案内については低い位置に設置されており、車椅子利用者や子ども等の眼高が低い利用者が設備をスムーズに利用できるよう、配慮がされていたと考えます。しかし、展示物に目を向けてみると、スペースや展示方法に関しては立位者に合わせていると感じられる箇所が多かったです。インスタレーションでの展示台では、高さや距離が立位者に合わせられており、展示台の上の展示物を見ることはできませんでした。そのため、インスタレーション展示の目的である、空間全体が展示となっていることを実感することはできませんでした。

③石川県立歴史博物館での発見



どの展示ケースも低めに設定されているだけでなく、展示ケースと床に 30cm ほどスペースがありました。そのため、展示ケースに近づくことができ、キャプションも傾けて設置されていたこともあり、展示空間ではジオラマ等小さな模型が展示されていましたが、車椅子使用時でも詳細まで鑑賞することができました。触察のための展示では、展示台が高いものもあったが下に空間がありました。加えて、触

察が目的のためケースに囲われておらず、そのぶん展示物に近づくこともできました。 展示空間だけでなく、ロビーに設置されている展示施設周辺のジオラマについても高さが低めに設定されており、車椅子利用者でも利用しやすい工夫がされていました。

【活動報告③伊勢鳥羽でのユニバーサルツーリズム】

—伊勢—日本屈指のバリアフリー観光に民間行政ともに力を入れているまち

最後に訪問した場所は、伊勢志摩サミットでも話題となった伊勢地域です。この地域は、国内でも特に先進的な活動をしており、数々の賞を受賞するなど、参考にするには最も適した場所でした。

今回は、そんな伊勢で私たちが体験した最新の事例を写真とともに報告します。

①観光マップ

観光案内所や、施設でもらえる観光マップがとても特徴的でした。下記に例を挙げてます。

・みえバリ (1)

→観光案内 MAP トイレや段差、障がい者割引などの情報に加え、障がい当事者の実際の意見が掲載されていました。

実際の当事者（車いす利用者）が観光をしている姿、また感想が記載されており、内容の信ぴょう性がある印象を持ちました。



・伊勢神宮周辺バリアフリーマップ (2)

→肢体不自由者がメインですが、内容が見ていて楽しいものでした。作成には実際に車いす利用者が携わっており、トイレの場所や段差の数、信号機の音まで様々な情報が集約されていました。また、車いすでも利用できる飲食店の有無やサービスなども掲載してありました。



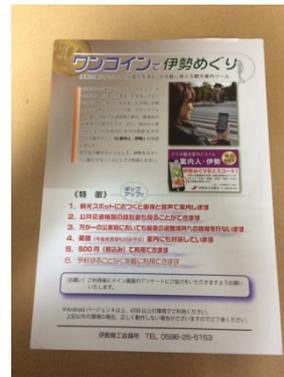
・お伊勢さん音声ガイド写真集（無料）(3)

→写真にタッチペンをかざせば写真の内容について読み上げをしてくれるものです。ただしタッチペンは現時点では案内所内のみの貸出、(今後の展開もあり得ると考えられる)現在は主に外国人観光向けでした。



・e案内人・伊勢(4)

→伊勢神宮の魅力を位置情報を駆使してリアルタイムに受け取れるツールです(日 or ENG) 料金 500 円使用している人は見かけませんでした、(普及されていない印象)が内容はとても充実していました。以下に詳細を示します。



今回私たちは、伊勢神宮内宮・外宮、おはらい町、おかげ横丁を伊勢商工会議所が提供している「e案内人」(4)を使用し、観光調査を実施しました。e案内人はスマートフォンの位置情報を利用することで、観光スポットに近づくと画像と音声で案内する観光ツールで画期的なものでした。また、伊勢市駅観光案内所で伊勢志摩バリアフリーツアーセンターが作成したバリアフリーマップ(2)を入手し見比べ参考にしながら調査をしました。



e案内人は歴史がある観光スポットでありながら説明の看板が立っておらず、通り過ぎてしまう場所でも、自動で感知しスマートフォンの画面で知らせてくれるものでした。そのため、知識とすり合わせながら観光をすることができ、観光が充実する機能的なツールであったと考えています。



歴史的な景観と観光の楽しみを共存させる新たな取り組みは奈良でもできればいいなと思いました。また、情報の一つ一つが、従来のパンフレットや地図には載っていないようなもので、楽しむことに特化していたなと感じました。

【活動感想】

一年間の活動を通し、自分たちが今まで当たり前だと考えてきたことを見直すことのできる良い機会となりました。現在、超高齢社会に突入した日本では、バリアフリーや福祉などにとっても力を入れ始めて、またオリンピックに向け急速に整備が進められ始めています。整備があればそれでいいのではなく、いかに多くの人が使用しやすく、楽しむことができるのか。この点にもっと気を遣う必要があるという事を学びました。

今回の取り組みにご協力ご支援くださったすべての方に感謝いたします。

貴重な経験をさせて下さりありがとうございました。